実践報告

五島列島の若者を取り巻く生きづらさと地域

――社会参加が困難な状態にある若者が参加できる地域づくり実践へ向けて――

岡部　茜[1)]・青木秀光[2)]・深谷弘和[1)]・山本耕平[3)]

（立命館大学大学院社会学研究科／日本学術振興会[1)]・立命館大学大学院先端総合学術研究科／日本学術振興会[2)]・立命館大学産業社会学部[3)]）

本研究は長崎県五島列島を対象として，社会参加が困難な状況にある若者が地域との関係で感じている生きづらさを分析し，五島ひいては離島において若者支援実践の展開を検討することを目的とする。研究方法は，フィールドワークとそのなかでの半構造化インタビューである。そこで得られたひきこもりや不登校などの7人の若者，そのような若者を家族に持つ11人の家族，五島地域の16人の民生委員の語りをそれぞれ定性的コーディングによって分析した。分析の結果から，若者の支援を検討する際には，彼らの生活する地域の環境要因を考慮することが重要であることが示唆された。

キーワード：離島，ひきこもり，若者支援，地域づくり，定性的コーディング

立命館人間科学研究，No.29，111-122，2014.

Ⅰ．はじめに

1．本研究の問題意識

近年，若者支援の必要性が可視化されはじめ，若者支援は少しずつ充実し，2010年には総合的な支援制度としての「子ども・若者育成支援推進法」が施行された。それに伴い2011年には内閣府が支援者調査を実施[1)]し，また，厚生労働省は地域若者サポートステーションの増設を進め，実践体の拡充に取り組んでいる。

しかし，現行の若者支援政策は地域に存在する民間資源頼りの政策が多く[2)]，公的な支援整備が十分行われない中で，支援整備の流れから置き去りにされる地域も多く存在する。2011年の内閣府調査（座長：宮本 2012）では，若者支援者の都市規模による差異が分析され，政令指定都市では全国規模で実践展開が可能となる大きな法人が育ちやすく，若手の職員が多いことが明らかにされた。また，実践体自体が存在しない地域も多い。このような地域では，不登校・ひきこもり等の社会参加が困難な状態にある若者や彼らの家族，周囲は支援機関に助けを求めることもできず，孤立する状況があると推測される。

2．本研究の目的と意義

本研究は五島列島において社会参加が困難な状態にある若者やその家族，そして地域の民生委員に協力を得て行ったインタビューデータの分析から，五島において社会参加が困難な状況

1）内閣府（2011）「困難を有する子ども・若者の支援者調査」

2）そのうえ，民間団体への委託に関しても単年度予算委託制度等の政策的規定によって，支援者を非常に不安定な立場に置くものとなっている。詳しくは宮本（2012）らの議論を参照。

にある若者が地域との関係で感じている生きづらさを分析し，五島ひいては離島において若者支援実践を検討していく際の検討材料を提示することを目的としている。

本研究の意義は，大きく分けて二つある。一つ目は，離島の若者研究という意義である。これまで離島福祉研究の多くは，高齢者支援を中心的課題として取り組まれ，離島に生活する現代の若者の生活や彼らの抱える葛藤に迫る研究は数が限られる。ゆえに五島の若者を対象とする本研究は，離島の若者支援構築に際し検討材料として貢献する。二つ目に，若者支援研究と地域研究の結節点に位置する研究としての意義がある。ひきこもり等の社会参加が困難な状態にある若者が感じている生きづらさは，彼らが生活する地域社会と切り離すことができない。離島地域は，戦後復興期の過程において隔絶性，狭小性，孤立性といった地域的条件が経済的不利条件に転化し（三村他 1996），遺棄地域として経済政策のみならず教育政策や社会福祉政策などの多くの政策から切り捨てられてきた。さらに，新自由主義政策下に進められた社会福祉の市場化等もあいまって生活条件はより不利性を高めている。また離島では，伝統的な地域社会の残存と近代的コミュニティへの緩やかな移行との併存状況が指摘され（上田他 2008），この併存状況は，地域住民間の価値観に大きなばらつきを生じさせ，それぞれの孤立を深める危険性を孕む。若者たちの生きづらさを検討する際には，このような地域独自の生活条件をも分析する必要があるが，従来の若者支援研究では，地域の特性と若者が直面する困難への分析の弱さがあった。筆者らは，若者の「生きづらさ」を，藤野（2007）の整理を参考に，人間が周囲との関わりのなかで発達していく際に，環境や時代とのかかわりで生じる発達の困難さとして捉え，離島で社会参加が困難な状況にある若者の生きづらさとそれを規定する地域の環境要因の分析を試みる。

Ⅱ．研究方法

1．調査方法

本調査では社会参加が困難な状態にある若者が地域との関係で感じる生きづらさを検討するため，フィールドワーク[3)]においてインタビューを実施した。インタビューでは，①社会参加が困難な状況にある若者やその家族の五島での暮らし，②彼らに対する親族や地域の反応，③彼らに対する地域にある支え，④五島と島外との間の暮らしや子育てに感じる違いの四点を質問項目とし，半構造化インタビューの方法で行った。本研究ではこのフィールドワーク期間中にインタビュー協力を依頼した，若者7人，家族11人，民生委員16人の語りを分析する。協力者の若者7人は社会参加の困難な状態にある不登校やひきこもり，精神障害者当事者である。また，本稿では不登校の中学生を対象に含め，若者を14歳以上39歳以下の者とする[4)]。11人の家族はそのような状態にある若者の家族である。

3）フィールドワークは，3月5日から3月10日まで下五島の福江島に，3月10日から3月15日まで上五島の中通島に，計10日間滞在して行なった。訪問先は，五島市にある不登校・ひきこもりの居場所であり，親の会等の活動も行なっているフリースペースひまわりや，社会福祉協議会，保健所，五島観光歴史資料館などである。

4）本来ならば，地域若者サポートステーション事業等，若者支援政策の主な対象とされる15歳以上39歳以下を対象とすべき点かもしれないが，本研究対象地域で中学生の不登校を除くと，インタビューを行うことができる若者自体が極めて限られてしまったため，対象年齢の下限をやや低く設定した。

表 1. 調査協力者の属性

若者			家族				民生委員		
氏名	性別	年齢	氏名	性別	年齢	続柄	氏名	性別	年齢
A1	男性	20 代	B1	女性	40 代	姉	C1	女性	60 代
A2	男性	10 代	B2	女性	50 代	母	C2	男性	60 代
A3	女性	10 代	B3	女性	60 代	母	C3	男性	60 代
A4	男性	不明	B4	女性	40 代	母	C4	男性	70 代
A5	男性	不明	B5	女性	50 代	母	C5	女性	不明
A6	女性	10 代	B6	女性	50 代	母	C6	男性	60 代
A7	女性	10 代	B7	女性	不明	母	C7	男性	60 代
			B8	女性	不明	母	C8	男性	60 代
			B9	女性	70 代	母	C9	女性	不明
			B10	女性	50 代	母	C10	女性	40 代
			B11	女性	50 代	母	C11	男性	70 代
							C12	女性	不明
							C13	男性	60 代
							C14	女性	60 代
							C15	女性	70 代
							C16	男性	70 代

2. 五島地域

五島列島は九州の最西端に位置し，18 の有人島と 111 の無人島からなる。五島地域の人口は，1955 年の 149,583 人をピークに年々減少傾向にあり，2010 年国勢調査では 62,696 人（下五島地区が 40,622 人，上五島地区が 22,074 人）となっている。島内に大学や専修学校等が無いこと，雇用の場も不足していることから，高校卒業者の 9 割以上が島外に出ていき，戻ってくることは少ない。産業構造は，1970 年当時に比べると農業就業者が大幅に減少し，従来の農業・水産業主導型から 3 次産業へと移行している。

教育に関しては 2012 年度において，五島地域には小学校 33 校，中学校 17 校，高等学校 7 校（うち定時制 1 校）があり高校進学率は 99.3% であるが，大学等への進学率は 40.6% と低い。2011 年度の児童相談延べ件数は 1,526 件で，最も多いのが児童虐待（332 件）であり，不登校に関する相談は 91 件である [5]。

5）長崎県五島振興局（2012）「五島要覧」

3. 分析方法

インタビュー内容は IC レコーダーで録音し，トランスクリプトを作成した。分析方法は定性的（質的）コーディングを採用し，コーディングの作業には「事例 - コード・マトリックス」[6] の発想を取り入れた（佐藤 2008）。本研究での定性的コーディングは 3 段階にわけられる。まず，①インタビューによって得られたデータから特定のセグメントを切り出し，「脱文脈化」を行い，②それらのセグメントを「（定性的）コード」ごとに分類し，基本的な分析の単位となる事例を軸にして「事例 - コード・マトリックス」の形にまとめた。さらに，③先行研究との比較検討を行いつつ，いくつかの「（定性的）コード」ごとに「（概念的）カテゴリー」を生成した。なお，①～③の作業は常に繰り返し行った。特に

6）「事例 - コード・マトリックス」では，縦軸にコードが，横軸に事例が記入され，枠のなかには「文書セグメント」が入る。「文書セグメント」はインタビューデータのみならず，逐語記録およびフィールドノーツのなかの該当する箇所といった多様な技法によって得られた多様なデータを含んでいる。このように整理することで，事例の個別性や具体性に対して十分に配慮した上で，事例の特殊性を越えた一般的なパターンや規則性を見出すことが可能となる。

②と③の段階では，継続的な比較法（Glaser & Strauss, 1967=1996）により「複数コード間（複数カテゴリー間）での比較」,「セグメントとコード間（データと概念的カテゴリー間）の比較」,「複数のセグメント同士（複数のデータ同士）の比較」,「複数の事例間の比較」を行った。分析はそれぞれ，若者・家族・民生委員で分けて行い3つの立場からそれぞれに語られる《地域との関係で若者が感じる生きづらさ》を分析した。

4. 倫理的配慮

インタビューに際しては，調査協力者に対し研究内容について事前に文書と口頭にて説明したうえで，研究者と協力者の双方に一部ずつ用意した「研究倫理遵守に関する契約書」に記入してもらった。その際，IC レコーダーでの録音やプライバシーに関する事項の許可を得ている。また本研究では非常に人称性の高い地域を対象としているため，本人に関する情報の提示は最小限に留める。

Ⅲ．研究結果と考察

本研究の結果と考察では，それぞれの語りから生きづらさの生成に地域はどう関与しているかを分析し，①若者が語る《地域との関係で若者が感じる生きづらさ》，②家族が語る《地域との関係で若者が感じる生きづらさ》，③民生委員が語る《地域との関係で若者が感じる生きづらさ》の3つに分け言及する。なお本文の表記では，カテゴリーを｛｝で，コードを［ ］で，地域との関係で若者がもつ思い，葛藤の表記は強調のために《 》で括る。

1. 若者の語りに見る《地域との関係で若者が感じる生きづらさ》

若者の生きづらさと地域との関係に関して若者の語りから分析された要素は，①｛分断された地域とまなざし｝,②｛五島への思いの両価性｝,③｛「解き放ち」への期待｝である。また，各節記述の後に分析の根拠となったデータの一部を示し，コード，カテゴリー別に整理した表をつける[7]。

(1) 分断された地域と住民間の関係

離島は，高度経済成長期の経済成長重視の政策のもと，政策的に分断されてきた地域である。五島には多くの離島と同様に，政策的に本土から分断されることにより物理的・精神的距離が生じ，小さな地域での互助的関係が育ちつつも，そのような地域のつながりの中での若者の苦しさがある。｛分断された地域と住民間の関係｝は，4種類のコードから生成される。

五島でも多くの離島と同様に，地域のつながりが残っており，住民が互いに顔見知りである地域が多い。［地域の目］とは，このような地域で若者が感じる地域住民からのまなざしである。五島住民の密接な関係性は，互助的な肯定的側面も持つが（叶堂 2004），その一方で精神障害を持つ若者やひきこもる若者にとってスティグマを強める要素としても働き，より一層家庭へのひきこもりを強化させる。より強化されるスティグマは，本来地域社会を創造していく主体であるはずの若者から自己尊厳を奪い，さらには地域生活における自身の人権主張の力を奪い，地域社会から彼らの存在を潜在化させる（Goffman 1963=2003）。［排他性］とは，上記のような地域住民の関係の密接さゆえに，他地域からやってきた者やその地域の関係の密接さになじまない住民が排除されやすくなることを示す。このような五島の特性は，離島という条件によってさらに強まると推察される。［交通と孤立］とは，離島の若者が語る本土と五島との距離である。離島研究では他の交通基盤とは一線を画す，生

7）「データ」欄に抜粋するデータにおいて，質問者の言葉は《 》に示し，（ ）には調査協力者の氏名（表1を参照）とインタビュー実施の年月日を示す。また，［ ］中は，筆者注である。

活条件への架橋の影響が指摘されてきた（沖山・後藤 2001）。先行研究が示唆する「陸続きになる」ことの意味や影響から，離島の若者が感じる交通と孤立とは単なる距離の問題ではなく，海に囲まれる離島ゆえの物理的・精神的な距離・孤立でもあると考えられよう。また，このような地域で若者は［大人からの評価］としてコード化されるような，プレシャーを感じている。五島にある学校，特に高校は非常に部活動や補習が多く，朝の補習や元旦の補習まで存在し休みが非常に少ない高校もある。子ども・若者たちの生活時間の多く，学校関連のことで費やされ，その中で若者は大人たちのまなざしを強く感じとっている。

(2) 五島への思いの両価性

分断された地域とまなざしの下に生活する若者は自身が生活する五島に対して，様々な思いを持ち，その思いは常に一面的ではない。この｛五島への思いの両価性｝は，7種類のコードから生成される。

［遊び場がない］とは，若者たちのたまり場が限られていることを示す。映画館やカフェに同年齢とたまりながら恋人や友人と時間をともにする時間は，青年期にとって他者との関係のなかで自己像や自身の価値観を構築するための大切な時間である。また，近隣に一緒に遊べるような［同世代がいない］地域も少なくない。五島には高校や中学も少なく，本土に出る経済力を持たない限り，進路の選択肢が非常に狭くなる。［限られた進路］とは，そのような若者の進路の限定性を示している。他にも，カウンセリング機会の制限や精神医療の設備・備品への不満として［資源への不満］が語られた。［島外に出て感じる違い］とは，上記のような五島の環境下で育ってきた若者が，島外に出た時に感じる「カルチャーショック」として語られる思いである。五島と島外の環境を比べながら，若者は［五島への諦め］を語る。それは，分断された地域が規定する生活のもとで育つ若者が感じる島の限界でもある。しかし，一方でその諦めを語りながらも，もう一方では［五島に残りたい］という思いを若者は持つ。友達がおり，家族がおり，よく知る人々がいる五島で可能なら生活したい。離島特有の限定性の中で感じる五島への諦めと，それでも自分の生きて来た土地で生活したいという願いの間で，若者の思いは常に揺れ動いている。

(3)「解き放ち」への期待

五島において社会参加が困難な状況にある若者たちは，その困難さの中でもがきながらも仲間や場に出会い，抑圧されてきた自己を解き放っていくことへの期待を見出しつつある[8]。｛「解き放ち」への期待｝は，2種類のコードから生成される。

［仲間との出会い］とは，孤立していた状況から自身と同じように困難に向き合う仲間と出会うことである。若者たちが自身の直面する困難さに向き合おうとするとき，ともにこれまで自己を縛り続けてきた価値観を崩し，自身をともにつくり出していける仲間と出会うことは不可欠である（山本 2009）。また，そのような仲間と出会い，ともに自身の人生に意欲的に向き合う居場所も，若者にとって非常に重要な点である（前掲書）。［居場所との出会い］は，このような居場所を家の外に見出していくことを示している。

8）山本（2009）は，安心や安定を与えられる集団のなかで自己の課題と対峙し，ゆらぎつつも互いに支えあうことが保障されるなかで，自己の尊厳を強化し，自己の課題へと向き合う力を育んでいく実践を，「解き放ちのソーシャルワーク」と表現し，仲間と共に自己の生きづらさに向き合う若者とともに歩むひきこもりソーシャルワークの哲学を提起している。

表 2. 若者の語りに見る《地域との関係で若者が感じる生きづらさ》

カテゴリー	コード	データの一部
分断された地域と住民間の関係	地域の目	《人の目が気になるって，それはやはり●●さんも思う》はい。長崎だったら知らない人ばっかりなんで，まあ途中で時たま会うこともあるでしょうけど，そんなん滅多に無いと思いますんで，長崎だったら（A4：13/03/13）
	排他性	転校してきた時，来た時に僕，えーっと商店街であのここ，●●の商店街歩いとって高校生にあのなんやろう見られて，多分よそもんって思ったんでしょうね……（中略）……2 人組の高校生の人らにちょっと来いって言われて……（中略）……確かそんとき殴られてんすよねーボコボコに（A1：13/03/13）
	交通と孤立	要は出れないじゃないですか 不便やし 飛行機か船かしか出れないじゃないですか。長崎と橋が繋がるってなれば別って思いますけど《なるほどな》それ以外ないですね 多分 五島に［若者が］残る事は（A2：13/03/07）
	大人からの評価	自分の好きな事もできないし。●●［島外地域］の人はなんとかなるから大丈夫ってやれるけど，こっちの人はもっと頑張りなさいって（A7：13/03/09）
五島への思いの両価性	遊び場がない	《何処が一番の遊び場ですか。若者達の》無いですね 遊び場とか（それまた辛いよね 遊び場が無いのは）ですね 辛いですね。（A2：13/03/07）
	五島に残りたい	《五島ではやっぱ仕事が無かった》はい《自分の気持ちとしてはやっぱり五島には残っていたい。あまり五島に居たくない》やっぱり友達も居るし残りたいって思いますね。（A2：13/03/07）
	五島への諦め	《で遊ぶ場所や働く場所を作ると若者がちょっと五島に定着しそうな感じもする》多分無いと思いますね，五島に残る事は若者が，って思います，自分は《それは遊ぶ場所や働く場所があっても 五島に残る事は無い》無いでしょうね（A2：13/03/07）
	同世代がいない	《じゃあこっち来て誰と遊んでるの》遊んでない《遊んでないの。こっちの中学校の子とかとは遊ばないの》なんか，あんまり近くの子が居ないから（A3：13/03/14）
	資源への不満	ほんとは長崎とかに行きたいですけど墓は見なきゃいけないんですけどこっちにあるから《魅力はあんまあり感じてないの》はい。病院もあんまり薬とかも揃ってないですし。向こうだったら心理の先生とかも居るんで（A4：13/03/13）
	限られた進路	会話として入学したら何中？みたいなこととかがあるんですけど 僕五島の人間なんで五島の人間てみんな，●●高入るから，何中とかそんな会話まず無いっていう感じで。（A1：13/03/13）
	島外に出て感じる違い	分からんことが多すぎたというのか，ちょっとやっぱりテンパりましたね。んー色んな事，遊ぶっていうことがよく分からんかったし。あと あのー 長崎市内の路面電車があるんですけど路面電車にも乗られへんかったし。……（中略）……なんかちょっとカルチャーショックを一杯受けてるんすね。長崎っていうだけで，僕は。（A1：13/03/13）
「解き放ち」への期待	仲間との出会い	五島に帰ろうって思ったんですよね。佐世保にね●●君や●●が居るから全く何も無いよりかはそこに少しでも距離的に近いところって（A1：13/03/13）
	居場所との出会い	昔は無茶して薬一杯飲んだりとかしてたんですけど。……(中略)……《それをコントロールする時に一番の力になるのはなんだ》薬もありますけども，環境が変わったことで大分良くなってはきてます。《環境が変わったっていうのは》●●［支援機関名］に行くようになってから。（A4：13/03/13）

2. 家族の語りにみる《地域との関係で若者が感じる生きづらさ》

若者の困難さと地域との関係に関して，家族[9]の語りから分析された要素は，①｛伝統的コミュニティの中での不自由・閉鎖｝，②｛離島特有の生活条件｝，③｛支援の限定性｝，④｛五島での「解き放ち」に対する期待｝である。

(1) 伝統的コミュニティの中での不自由・閉鎖

家族や民生委員の語りでは，若者が個々の不自由さやまなざしとして語り，言語化することのなかった伝統的コミュニティの存在とその中での不自由さや閉鎖性が語られた。｛伝統的コミュニティの中での不自由・閉鎖｝は，4 種類のコードから生成される。

［地縁･血縁の残存］とは，「墓を守る」や「地域全員での草刈り」といった行事に見られるような伝統的な地域のつながり，親族関係のつな

9）分析に際しては，インタビュー協力者の家族が，資源の限定される中でつくられてきた親の会に参加し，仲間や支援者との出会いの中で育てられてきた家族であることに留意する必要がある。五島にはこのような家族ばかりではなく，いまだ孤立する家族も少なくないが，彼らと出会うことは極めて困難である。

がりが五島に残っていることを示している。［地域住民との距離］とは，このような密接な関係が生む近隣の人々との距離である。この距離は互助的な作用を家族にもたらす場合もあれば，介入される苦しさにつながり，家族をひきこもらせ孤立させることもある。精神障害やひきこもりなど，何らかの負い目を感じる家族や若者は［噂話の広がりやすさ］として，地域住民の間での噂話の広がりを指摘する。［わが子と地域への願い］とは，このような地域で生活する家族が生きづらさに出会ったわが子と地域に持つ思いである。家族は，五島の生活条件を日々の若者との生活から検討し，若者のためにも地域から隠そうと考える一方で，この地域コミュニティで周囲と支え合いながら生きていくことはできないか，という願いを育んでいる。

(2) 離島特有の生活条件

また，離島特有の生活条件が及ぼす生活の困難さもある。｛離島特有の生活条件｝は，2種類のコードから生成される。

［移動の困難さ］は，離島と本土との移動の困難さを示す。例えば，五島から長崎県の港に向かうために往復約1万円,4,5時間は費やされる。島の人々は困難に出会い，支援機関や病院，親の会などの支えを求めようとしても，本土と海で分かたれるために容易には参加できない。また，［仕事がない］とコード化されるように，五島における就職先の少なさがある。五島の就職先は公的機関や学校，病院の職員，そして高齢化に際して重要が高まる介護職がほとんどであり，就労への参加形態は極めて限定されている状況がある。

(3) 支援の限定性

家族は，生きづらさに出会った若者と向き合いながら，五島における支援の限定性を感じている。｛支援の限定性｝は，3種類のコードから生成される。

［居場所がない］とは，学校や仕事場以外には居場所を見出すことのできない五島の資源の不足を示す。五島に居場所がない中で若者や家族は，孤立を強めている。また上五島では数年前までひきこもる若者の親の会が存在せず，支援の限定性に関しては，居場所等の支援の不足だけでなく，実践を創りだす際の困難も含めて検討される必要があり，そこには伝統的コミュニティや離島特有の生活条件との関わりへの着眼が重要となる。［学校に対する評価］とは，不登校等を学校に相談した家族の評価であり，肯定的な語りも否定的な語りも見られる。これは，離島以外の地域でも語られることだが，遊ぶ場も少なく，子どもの生活の場が限定される五島で，学校は家族にとって非常に重要な相談の場である。また，同じように困難に向き合う仲間に出会うことができる場もなく，離島ゆえに他地域に支援を求めることが容易ではない五島において，学校の対応が家族に与える影響は必然的に大きくなる。これはまた，［公的窓口に対する評価］にも当てはまる。

(4) 五島での「解き放ち」に対する期待

若者たちが困難に出会いながらも自身の「解き放ち」に対する期待を育んできたように，家族も希望を膨らませる。家族の語りには，若者の語りには見られなかった，五島という地域においての「解き放ち」に対する具体的な今後の展望が見え隠れする。それは他者と出会うことが困難な状態にある若者よりは他者とつながりやすく，時間を見つけて本土に渡り支援者に出会ってきた家族の積み重ねの中で生じている可能性として考えられる。｛五島での「解き放ち」に対する期待｝は，2種類のコードから生成される。

［支援者意識の芽生え］とは，自身が主体となり，五島で支援実践を生み出していこうとする思いの育ちである。五島の家族の語りからは，支援の限定性に葛藤しつつも，そこから支援を創造する主体としての立ち上がりを読み取るこ

表 3. 家族の語りに見る《地域との関係で若者が感じる生きづらさ》

カテゴリー	コード	データの一部
伝統的コミュニティの中での不自由・閉鎖	わが子と地域への願い	私は将来ね，この子が病気をずっと続くだろうって。だから地域の人もキチッと分かってもらったら自分がいなくなった後でもね「あら●●さん」って声かけてくる人でも1人でもでてくるかなあ，っていう思いで家族会に夫婦で入ったんですよ。(B9：13/03/06)
	噂話の広がりやすさ	田舎の人は全般的に人の噂話が大好きかなあっていうの。《なるほど》ちょっと何かあると何処でもそうなのか分からないけど，どうしても話してしまうとか。そんな事言わんでもいいのになあって思う事を（B11：13/03/06）
	地域住民との距離	心配して学校に行かないのに色々言ってきてくれるんだけど，親切心で言ってきてくれるんだけどそん時凄いしんどかったんですけどね。結構色々，甘やかし過ぎとか色々言われたりしたから（B6：13/03/07）
	地縁・血縁の残存	人があまりにも親戚だらけって言うかな。みんながどっかの従兄弟とか，もうみんながみんな，街全体が親戚だらけとか，五島の中でみんなが知り合いみたいな感じを感じるとろこはありますね（B7：13/03/09）
離島特有の生活条件	移動の困難さ	不便な所はやっぱり，まず交通ですよね《交通ね》もう交通が。結局サッと着の身着のままで車でサッと出れるっていうの無いんですね（B9：13/03/06）
	仕事がない	不便な所は 特に今私が住んでる所は●●で北の端なんですけど 仕事が無いことですね。特に●●からだと通勤が大変だから「すいませんけど」って断られる事が多いので（B1：13/03/13）
支援の限定性	学校に対する評価	保健室登校してても学校の行事がある時があるでしょ遠足とか，結局学校の先生も外に出るので「この日はすいません お休みさせて下さい」って言われるんです。本人は頑張って保健室に行くのにそれ辛かったです（B2：13/03/13）
	公的窓口に対する評価	市の保健所に「どうしたら良いですか」って言ったら「まあ話をする事ですね」とか「1回病院にかかったらどうですか」とか，そういう「息子さんが悩んでるんなら悩んで本人を病院に連れて行って相談したらどうですか？」という話しかしてくれなかった。(B8：13/03/10)
	居場所がない	2学期はそういうような感じで［学校に行けず］2人でこの狭い島の林道も含めて全部気分転換にドライブしました。多分●●さんちの今子どもさんそこもアタシが話したら「あウチもです」あちこち林道ドライブしながら気分転換して。行くとこがないんですよ島はね（B3：13/03/14）
五島での「解き放ち」に対する期待	支援者意識の芽生え	やっぱりこれは体験した人じゃないと分からない所がいっぱいあるのでこっち［五島］に来る前に，あっち［五島に戻る前に住んでいた地域］では親の会とかあってちょっと繋がりが出来たけどこっちでもそういう事がしたいなあとは思って，だからできる事はしたい（B4：13/03/14）
	ゆるやかなつながり	それで島でなんかあちこち引越しして周りに心を開けなかった私達が今，島に来て。今やっと「居るんだ。こんなところに，ちゃんと分かってくれる」あの●●ちゃんとかね。……（中略）……色んな人に見守ってもらえる繋がり多分それを研究するためにこれしてるんだろうな。(B3：13/03/14)

とができる。また，［ゆるやかなつながり］とは，五島に根付く地域住民相互のつながりを土台にして展望される，それをより若者や家族がエンパワメントされるようなつながりである。ここには，五島独自の条件を活かして構築される，若者と家族がより生きやすい地域づくりの可能性が見出される。

3. 民生委員の語りに見る《地域との関係で若者が感じる生きづらさ》

若者の生きづらさと地域との関係に関して，民生委員の語りから分析された要素は，①｛伝統的コミュニティの中での不自由･閉鎖｝，②｛伝統的コミュニティの変容・解体｝，③｛離島特有の支援条件｝，④｛離島での若者の育ち｝である。

(1) 伝統的コミュニティの中での不自由・閉鎖

長年地域で生活してきた民生委員も五島地域での不自由さを語る。しかし，その語りは実際に生きづらさに出会った若者やその家族とは異なり，より肯定的に語られる。｛伝統的コミュニティでの不自由・閉鎖｝は，4種類のコードから生成される。

［地域の目］とは，地域の人々の密接な関係性の下で意識されるまなざしである。これは若者の語りからも抽出されたが，同じ事象も民生委員に比べると若者の方がより否定的に語られた。このような違いは他のコードでも見られる。家族の語りでもコード化された［噂話の広がりやすさ］は，示される状態像は同じだがそこに込められる意味が異なる。民生委員より家族においてこのコードは否定的に語られ，民生委員の方では噂話の広がりやすさがもたらす葛藤というよりは当然ある前提として語られた。しかし，このような若者や家族とのズレもある一方で五島地域での窮屈さが語られることもある。［窮屈さ］とは，地域住民からのまなざしを感じやすい地域で感じられる圧力である。［どこどこもん］とは，地区ごとに地域アイデンティティが強く存在することを示す。自分は●●の人間だ，という地域アイデンティティは住民間の互助を促す一方で，外の地区から来た人々に疎外感を感じさせ，地域への参加を困難にさせる側面も持っている。若者の語りに［排他性］が見出されたが，「どこどこもん」というアイデンティティを形成することが困難な若者や家族は地域に所属意識を持つことが難しく，また疎外感のもとに孤立しやすい。

(2) 伝統的コミュニティの変容・解体

民生委員の語りでは，若者や家族の語りからは生じてこなかった伝統的コミュニティの変容が語られる。｛伝統的コミュニティの変容・解体｝は，3種類のコードから生成される。

［ムラ組織に入りたがらない若者］とは，地域の青年団や消防団への参加に消極的な若者であり，ここでは若者自体の減少と共に，従来と比較してそのようなムラ組織への参加に消極的な若者の姿勢が語られた。また，民生委員が感じている地域住民相互の関係性の弱まりを示す［つながりの弱まり］も見出された。さらに［家庭のしつけ機能の低下］として，家庭のしつけ機能の変容・低下がやや否定的に語られ，世代間のギャップや自分たちとは異なる若い世代の考え方への戸惑いを民生委員は感じている。

(3) 離島特有の支援条件

また，家族が離島特有の生活条件や支援の限定性として主に否定的に語った要素は，民生委員ではそれほど否定的に語られず，離島特有の支援条件として語られた。民生委員の語りからは，離島の条件下での若者支援の難しさを読み取ることができる。｛離島特有の支援条件｝は，5種類のコードから生成される。

［仕事がない］とは，五島で若者が就くことができる仕事の数や種類が非常に限られることやその職種が非常に限られた状態にあることを示す。民生委員は地域で就職できずにいる若者の存在や彼らの葛藤を少なからず認識しつつも，仕事のない五島で支援実践をいかに創造していけばいいのか，と動けずにいる。また，［移動の困難さ］とは，本土と五島の間での移動の困難さである。これは，本土での研修参加の困難だけでなく，児童相談所など本土にしかない機関との連携の難しさにつながる。他にも，離島特有の支援条件として［五島の人と島外の人との間の壁］がある。これは，島外から移ってきた住民や島外から来る支援者と島出身の住民の間にある壁を示す。さらに，［専門家がいない］とは，若者支援を展開・創造していく際に感じられる専門家の必要性とその不在を示す。そして，［支援の一歩を踏み出せない］とは，そのように「専門家がいない」ためにスーパーバイズを受けることが難しく，支援の必要性を感じても実行することに戸惑ってしまう迷いを示す。

(4) 五島での若者の育ち

五島で若者が育つことに関しての語りを｛五島での若者の育ち｝として示す。これは，3種類のコードから生成される。

［五島での子育て］とは，五島の生活条件下での子育てを示す。自然が多いことや幼少期から

表 4. 民生委員の語りに見る《地域との関係で若者が感じる生きづらさ》

カテゴリー	コード	データの一部
伝統的コミュニティの中での不自由・閉鎖	地域の目	田舎はもう私もほとんど100％どこに住んでるか，知ってますのでね。だからやっぱり世間にすぐ知れるというのは地域の属性ですからね（C16：13/03/05）
	窮屈さ	優等生であらなければいけないとか，この位置に居なければならないみたいなプレッシャーみたいなのは多少ありましたね。で，私は大学で一度出たんですけども その頃はやっぱり気持ちが楽になったというか（C5：13/03/12）
	噂話の広がりやすさ	あの子がちょっと学校行ってないみたいよとか……（中略）……そういう情報はやっぱり町の誰かから来ますね。やっぱり小さいので，そういう噂はすぐ立ちますね（C5：13/03/12）
	どこどこもん	《地区同士で対抗心みたいなのとかって言うのは無かったり 》そりゃ ありますよ（あるんですか）……（中略）……もう昔から対抗心があったようですね そういうのが（C8：13/03/12）
伝統的コミュニティの変容・解体	ムラ組織に入りたがらない若者	なかなか そういうなんかな今の若者っちゅうか 全体的にそういう［消防団等の］色んな組織に入りたくないっていう感じがね 結構あるんですよ（C8：13/03/12）
	つながりの弱まり	私の周りで言えば，今，大人との関わりや地域の人との関わりが，五島でも少なくなってきてるんですよ。（C10：13/03/13）
	家庭のしつけ機能の低下	家庭での躾っていうとが，かなり変わってきているんじゃないかなと思いますよ。……（中略）……今は もう 子供が家の事を手伝う事をする事自体無いでしょ畑荒れ放題やし。（C2：13/03/11）
離島特有の支援条件	支援の一歩が踏み出せない	自分は出来るかな，大丈夫かなっていうそういうトコでここまで来てるんだけど，あと1歩が踏み出せるかなって言う所がある。C12：13/03/08）
	専門家がいない	専門家がいないちゅうのがありますよねこっちにはね。さっき言った子どもの問題でも児相とかなんとかそういう専門的な人あるいはそういう施設はやっぱりこっちには無いから（C3：13/03/11）
	仕事がない	公共事業一切無くなりましたので土木関係の人達は仕事が無くって，若い人たちは 雇用はまずありません。（C1：13/03/11）
	移動の困難さ	《結構 交通費が凄い高いって》そうですね。アレが安くなれば 今往復1万円ですもんね……（中略）……こっちは行くだけでちゃんと旅費からなんか用意せんばいかん（C4：13/03/11）
	五島の人と島外の人との間の壁	［五島の外から来た人は］最初はやっぱり壁があるみたいですね。『ああ こんなのもしないと行けないんだと』とか 例えばココだったら草刈りとかあるんですよ月に1回（C5：13/03/12）
五島での若者の育ち	五島での子育て	ちっちゃい時から知ってる人がおんなじように親になり親になって自分の子どももまた同級生だったりなんかだったりするから。そういう所ででも色んな話も聞けるし（C10：13/03/13）
	他者との関係づくりの苦手さ	自分が人と関わらなくても関わりが出来ていくからもう安穏とした世界だったけどもね。で大学に行ったら誰も話し掛けて来る人は居ない，誰も話せない言葉も。……（中略）……でその子が言った事が「都会は自分から話しかけなきゃいけないんだ」って。（C1：13/03/11）
	大人しい子ども	五島の若者は大人しかですもんね（大人しい）自分の意見を通そう都会の若者みたいにこうあるべきだとか こういうアイデアがあるとかそういうのあんまり言わんですもんね。（C4：13/03/11）

知る人々に囲まれての子育てには，肯定的な語りが存在する一方で，顔見知りの間で育つがゆえの困難を見出す語りも存在する。このような固定的な人間関係の下で育った若者が持つ，見知らぬ他者との関係づくりの苦手さは［他者との関係づくりの苦手さ］として語られ，素朴な島の若者像が語られる一方で，［大人しい子ども］とコード化されるような，従順や大人しいといった主体性の乏しい側面が指摘された。

Ⅳ．おわりに

本稿では，五島の地域条件が社会参加の困難な状態にある若者の生きづらさにどのように影

響してきたかを分析してきた。ただし本研究には多くの限界が存在している。特に，生きづらさと離島環境因子との関係に関しては，離島以外の地域や量的研究と比較し検討を深める必要がある。また，本稿で考察を行うことはできないが，本稿で分析した三者それぞれのデータを相互に比較すると，そこに伝統的コミュニティに対する思いのズレがあることが見えてくる。そして，このズレが知らぬ間に相互の孤立を強化しうることが指摘できるだろう。これらの点は，今後の分析のなかでさらに検討する必要があるだろう。

最後に，本研究を行うにあたり，調査に協力してくださった五島の皆様，また，本研究の調査からデータの検討に関してご意見をいただいた皆様に厚くお礼申しあげたい。

参考・引用文献

藤野友紀（2007）「支援」研究のはじまりにあたって―生きづらさと障害の起源．子ども発達臨床研究（1），45–51.

Glaser, B. and Strauss, A. L.（1967）*The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. New York: Aldine Publishing Company. 後藤隆・大出春江・水野節夫（訳）（1996）データ対話型理論の発見．新曜社.

Goffman, E.（1963）*Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*. New Jersey: Prentice-Hall, Inc. 石黒毅（訳）（2009）スティグマ―烙印を押されたアイデンティティ．せりか書房.

叶堂隆三（2004）五島列島の高齢者と地域社会の戦略．九州大学出版会.

三村聡・永木正和・横川洋・上野重義（1996）離島産業構造の変化と展開に関する一考察．九州大学農学部学芸雑誌，50（3・4），121–142.

宮本みち子（2012）法人の規模から見た活動の実態．困難を有する子ども・若者の支援者調査．内閣府．57–67.

長崎県五島振興局（2012）五島要覧.

沖山観介・後藤春彦（2001）離島の基幹産業に与える「架橋政策」の影響に関する研究―佐賀県加部島における農業を事例として．日本建築学会計画系論文集，550，193–200.

佐藤郁哉（2008）質的データ分析法―原理・方法・実践．新曜社.

上田礼子・安田由美・前田和子（2008）離島における養育行動の時代差―子ども虐待予防の子育て環境構築の視点から―．民族衛生，74（3），99–113.

山本耕平（2009）ひきこもりつつ育つ．かもがわ出版.

（受稿日：2013. 6. 3）
（受理日［査読実施後］：2013. 12. 6）

Practical Research

The Local Community and the Difficulties of Young People Living on the Goto Islands: Designing Community Development Allowing the Participation of Young People with Societal Difficulties

OKABE Akane[1)], AOKI Hidemitsu[2)], FUKAYA Hirokazu[1)] and YAMAMOTO Kohei[3)]

(Graduate School for Sociology, Ritsumeikan University/Japan Society for the Promotion of Science[1)], Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences, Ritsumeikan University/Japan Society for the Promotion of Science[2)], College of Social Sciences, Ritsumeikan University[3)])

The purpose of this paper is to analyze problems that young people who have difficulties in social participation face in their local communities, and to examine the development of a support system for young people living in isolated islands, in this case, the Goto Islands of Nagasaki Prefecture. We conducted fieldwork and semi-structured interviews with 7 young people who are either suffering from Hikikomori (social withdrawal) or are habitually absent from school, 11 family members of those young people and 16 local welfare commissioners on the islands. Their answers were analyzed using the qualitative coding method. Through analysis, we discovered that it is important to consider the environmental factors generated by the local community where these young people live in order to develop a better support system.

Key Words : isolated islands, HIKIKOMORI, youth support, community development, qualitative coding
RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.29, 111–122, 2014.